

話しながら意識される書き言葉に対する考察

A Study on the Conscious Written Language While Talking

中山 英晋
Eishin NAKAYAMA

Keywords : information processing in the brain, consciousness of the written language,
degree of completeness, sharing perception

キーワード : 心内の情報処理、書き言葉の意識化、完全性の程度、認識の共有

1 はじめに

1.1 背景

日本語教育の現場において、重要視されていることは何であろうか。外国語として日本語を学習している以上、話す・聞く・書く・読むの四技能のバランスがとれた習得を目指すはずであるが、実際はなかなかうまくはいかない。日本語でコミュニケーションをとるために学習者のニーズに合うのは、会話力の向上を目指した授業が第一に思い浮かぶ。さらには、検定や就職などの際に試験を突破するためには、読解力を伸ばすこともよく求められている。では、書く能力は、という点意外にもそこまで追及されていない現状に思い当たる。「書く」というと、漢字などの文字を覚えるために書くことは通常の発想であろう。では、文字や表現を用いた全体的な文章力はどうか、という点、もちろん作文の授業はある。しかし、ひとりひとりと向き合わなければならない作文の授業では、教師の限界を超える場面がたびたび生じ、時間内に適切な指導を続けるには、どうしても無理なこともある。また、検定時や就職時には高いレベルの文章力をそこまで求められないこと、文章に慣れ親しむうちに徐々に上達していくと社会に思われていることなどの要因もあって、学生として学習している間は、学習者サイド、教師サイド、社会サイドのあらゆる方向から、文章力への期待は薄いのではないか。漢字を「書く」場合でも、最近のインターネット社会という側面から、漢字を書くよりは読むに重点を絞って、漢字に対するアレルギーを減らしていこうという現場も少なからずある。これではますます文章力の上達からは遠のいてしまう結果となろう。さらには、文章を綴る上での表現方法である言葉の使い分けがなかなかできないという声もよく聞かれる。文章では、文章特有の表現である書き言葉を駆使することが必ず求められてくる。しかし、山本・大西(2003)の指摘どおり、

この「項目が学習困難な項目として挙げられることは滅多にない」。以下は、山本・大西(2003)が挙げた日本語学習者のレポートの一部である。

- ①韓国では、キムチを食べたことがないという人がいないように、韓国服を着たことがない人はいない。つまり、韓国人だったらみんな韓国服の大切さがわかる。
- ②中国において、故宮博物院は非常に重要なものである。故宮博物院の中においてある文物は、みんな歴代皇帝が収集した宝物だから、非常に歴史の価値を持っている。

下線の部分を見ると、文法的にも間違いはなく、意味伝達に関しても問題ない。それにもかかわらず、明らかな違和感を覚えてしまう。①では「だったら」「みんな」はいいのか、②では、「おいてある」はいいのか、「非常に歴史の価値を持っている」は何かおかしい、などという感想を持つのではないだろうか。なぜ、このような文章を書いてしまうのかというと、それは書き言葉がしっかりと認識されていないことによるものであろう。認識されていない状態では、運用することは不可能である。

日本語学習者の状況についての指摘をしてきたが、では母語話者の場合には同じような状況は起きないのか。そもそも文章を綴るのが上手だといわれている人には、どのようなタイプの人がいるのか。思い巡らしてみると、まず作家や評論家などの文筆家、次に記者や編集者などのマスコミ関係者、それに大学教員や研究者などの研究機関従事者といったところではないだろうか。これらの職業に携わる人は、元々得意であったのかもしれないが、単純に文章に接し、書く機会が多いということが容易に想像できる。このような職業に就かなければ、上手に書くことができないのであろうか。そのようなことはなく、実際はこのような職業についていなくとも、文章力がある人は存在する。では、何が文章力のあるなしを分けているのか。文章力を高めるためには、様々な要素が必要であろうが、文章のパーツである書き言葉の存在を無視するわけにはいかない。前述のように、日本語学習者にとって、書き言葉はなかなか意識されず、文章力向上は非常に時間のかかる作業であるが、母語話者にとっても書き言葉の習得は難しい問題ではないだろうか。実際に母語話者でも文章を書くのが不得手だという人も少なくない。このようなことから、この問題は学習者に限らず、母語話者においても共通の問題であろうと推察できる。日頃から文章に接している人は書き言葉を意識する機会が多く、初めから、書き言葉を用いて思考し、頭の中での推敲が重ねられることに慣れていくのだろう。では、文章に接する機会が少ない人は書き言葉を意識しないのであろうか。書き言葉を意識する機会が多くなれば、自然と話し言葉と書き言葉の違いに気づきを感じ、それが文章力の向上につながるはずである。どのようなときに書き言葉を意識し、それはどのような心的プロセスによるものなのかを探ってみたい。

1.2 問題提起

話し言葉と書き言葉の出現または性質を考えれば、当然ながら、話し言葉を基本的な存在としてみなすことができる。それは話し言葉が、人にとって最も自然で多様性と融通性に富む原点であることは明白であるからである。一方書き言葉は、書くおよび読むという、言語を操る上での二次的能力を駆使しながら使うもので、話し言葉に次ぐと考えられる。そこで、話し言葉を基本とするのであるから、遊離していった書き言葉を話し言葉と同一または近づけようとしたのが、言文一致の流れである。しかし明治期の言文一致運動は、話し言葉と書き言葉のある程度の接近を認めたが、現状では、違った体系があるのではないかと疑いたくなるような「異質な存在」としての認識がある。母語話者にとってみれば、基本である話し言葉を改めて習得するという意識はさほどないと思われるが、書き言葉に関しては事情が少々異なる。巷の書店や図書館をのぞけば、例えば「文章上手になるテクニック」などと冠した書物が所狭しと並び、時を経るにしたがって、減るところが常々新しいタイトルを身にまとい、本棚を埋め尽くさんばかりに増えているのが実感である。さらには、大学の学生に作文の授業を展開するのは全く珍しくなく、その後のレポート作成や論文執筆に有用であるという認識に基づいているのは疑いようがない。母語の駆使が未熟な子ども対象であればすんなり落ち着くが、社会で活躍している普通の大人や大学で知的生産をしている学生でも、いかに書き言葉を習得するのが難しいかという状況がわかる。

では、書き言葉の習得にあたって、大学などではどのような作文の授業が展開されているのだろうか。これについては、次章でまとめて述べたい。いずれにせよ、書き言葉の習得が問題点にのぼるということは、成果が十分にあらわれていないという示唆がある。

このように、母語話者にとって話し言葉は習得済のものであり、そこから派生したであろう書き言葉の習得を、作文の授業などを通して、いかに効率的に進めることができるかといったことがよく論じられている。その際に作文など、書き言葉を使用しなければならない場面で話し言葉を使用するのは、「問題だ」「奇妙だ」または「嘆かわしい」という方向で論じられるのが常である。一方では、それは是正する必要があると言われたり、また他方では、どうしてそのような現象が生じるのかが研究対象に選ばれたりしている。日本語学会2013年度春季大会シンポジウムで行われたディスカッションでも、パネリストから次のようなことが発題されている。野田春美は、文章中に登場する話し言葉または話し言葉的表現に着目し、それらを読み手の存在を意識した表現方法であるといった論を提示している。また田中ゆかりは、インターネットの一般化に伴い、PCメール、携帯メール、ブログやSNSなどで用いられる「打ち言葉」が出現したことで、方言または方言に似せたものが話し言葉的に使用されている事態を指摘している。そして、「打ち言葉」上に使われる方言は話し言葉としてではなく、文学などの書き言葉における表現手段としての用法を喚起させると結んでいる。さらに野村剛史は、明治期における言文一致運動の結果、成立した「言文一致体」＝「書き言葉口語体」を使った手紙文を題材に、話し言葉が書き言葉の世界に侵入または書き言葉が話し言葉に同調していく様子を

論じている。話し言葉が話すときだけではなく、文章の中に入り込むことが頻繁にあり、それはどのような条件を満たした結果なのかなど、興味は尽きないが、その一方で、反対方向を扱ったものがなかなか発見できない。書き言葉は話し言葉からの一方的侵入を許すのみで、書き言葉からの越境は皆無なのであろうか。確かに書き言葉は二次的能力のなせる結果であり、基本的能力を用いた話し言葉がスタンダードとして扱われるのにためらいはない。しかし、二次的能力を先に身につけている場合、もしくは基本も二次も分け隔てなく区別なく身につけている場合はどうであろうか。これは、母語話者にはなかなか当てはまらないだろうが、日本語学習者に見受けられる現象である。場面を理解しない発話や辞書掲載の言葉の単純使用、文体混用や個々の表現の無理解によるルール無視の会話などといった例の枚挙には暇がない。日本語教育とのかかわりからも、書き言葉が談話や対話の中に生じるといった現象を突き止め、そのプロセスを解明することが求められているのではないか。前述のシンポジウムでの報告の結びには、次のようなことが指摘されている。「問題点として指摘されたことは、本シンポジウムの関心が、(中略) 書き言葉に見られる話し言葉にあった点である。今後は話し言葉に見られる書き言葉という視点も必要であろう。」やはり、一方向の現象を取り上げたら、次は別の方向の現象を取り上げるべきだというのが公正な考え方であろう。さらに杉江(2001)も、「文章を書くときに話し言葉を書き言葉に改めるという作業を繰り返すうちに、初めから書き言葉で思考し、文章が書けるようになるのではないか。」と提起している。初めから書き言葉で思考することは、人の基本的認知能力を使ったコミュニケーションである会話を知らず知らずに想定している。会話を構成する談話の中に書き言葉が越境侵入をすればするほど、書き言葉習得の近道になるのではないかという示唆とも受け取れる。

2 書き言葉を取り巻く環境

2.1 書き言葉の習得について

2.1.1 日本語母語話者の場合

前述のように、大学などの高等教育機関においては、課題としてレポートをまとめ上げるといった作業が幾度となく訪れる。それまでの教育機関、すなわち高等学校などでは、学問的なことに関して言えば、各科目についての知識を吸収するという作業で大半の時間が占められている。作文や小論文を書くために考える時間もあるにはあるが、比率からすると少ないのではないだろうか。石黒(2004)は次のように言っている。「日本語では話し言葉と書き言葉とではそのスタイルが大きく違うにもかかわらず、作文というものが中等教育できちんと教えられていないために、書き言葉で文章を書けない人が珍しくありません。」この状態のままで、大学から課されるレポートや小論文をその都度仕上げていくというのは、確かに難しい作業であるように思う。そこで大学側も文章力を身につけさせるべく、それ相応の授業を用意し、学生を迎え入れている状態にある。

では実際に、どのような授業が展開されているのだろうか。小野（1994）は看護学生に対して、自己紹介の作文を課し、書き言葉上の問題点を抽出している。書き言葉上の問題点とは、話し言葉とみなされるもの、違和感のあるもの、留学生に対して規範として示せないものとしている。結論として、学生は頭に浮かんだままの思考で言語化し、それは話し言葉と同一もしくは話し言葉に近い表現を試みる傾向があり、話し言葉を書き言葉に変化させる必要があるとは考えていない。その理由は、話し言葉と書き言葉を明確に区別する意識が欠落していたり、どのような書き言葉を選択したらよいかという思考の操作ができていなかったりすることによる、としている。杉江（2001）は短大生に対して、自己紹介の作文を書き言葉上の予備知識なしで課し、その後注意点を示して自分の作文を推敲させるという方法をとっている。その結果、問題点がどの程度解決されたかを観察し、ある程度の成功を収めたが、それと同時に、一文の均衡を保つためには、単純に話し言葉を書き言葉に転換するだけではなく、文末との調整が必要になることを導き出している。大学までで、書き言葉を意識して学ぶことはほとんどない。しかし意識的に学習しないからこそ、感覚がずれていき、話し言葉と書き言葉の混用が起きてしまっている。この点を是正するこれらの授業でも、結局は意識化と繰り返す訓練によるものである。

2.1.2 日本語学習者の場合

日本語教育では、通常は話す・聞く能力をつけさせようとするため、最初の段階では話し言葉を学習する。話すときにいつでもどこでも使えるようにとの配慮から、ですます調の敬体からスタートし、しばらく学習した後には、親しい間柄での会話で使える常体を取り入れられていく。常体は文章にも頻繁に登場し、書き言葉として読み手との関係にかかわらず使用されるが、初級の時点では、あくまでも友人などの関係にある相手に使用する特別な文体であると教えられる。そして、この初級での知識そのままに中級や上級へ進むことも珍しくはなく、常体で書く経験を上級になってもしていないということも起こり得る。これは、書き言葉を駆使して、文章力を高めようとする以前の問題であり、作文に関する意欲もなかなか湧いてこないだろうというのは想像に難くない。

では実際に、どのような授業が展開されているのだろうか。田中（1997）は、上級学生に対して、初めに作文の授業で何を得たいかを尋ねている。その中には「話し言葉と書き言葉をはっきり知りたい」という項目も登場している。話し言葉と書き言葉を区別せずに長い間使い続けた結果、その矯正が難しくなるといった指摘である。その後、作文→添削→清書→返却という段階を踏んでいるが、これは地道だが最も標準的な作文授業だと思われる。ハドソン（2003）は、上級学生に対して、曜日を分けた話し言葉と書き言葉の授業を展開している。一方は話し言葉のためにドラマを放映し、もう一方は書き言葉のために新聞・雑誌記事などを利用するといった具合だ。学習効果を高めるために、一方の授業で学んだ情報は他方にも生かすように留意され、四技能をバランスよく身につけさせるべく、作文というよりも様々なタスク

が用意されている。結果として、話し言葉と書き言葉が異なる状況に共存するという現実を反映し、それを学習者に認識させやすく、また、常に自然な文脈設定の中で接することができ、話し言葉と書き言葉の両者に均等に注意を払うことになり、意識化という面で成功したと語っている。どちらもやはり繰り返しが必要であり、習得には訓練が必要ということなのだろう。しかし、どの程度の期間が必要であるかといった問題には答えが出ておらず、訓練を続ければ成果が出るというのは、当然の理ではあるまいか。また、後者では作文らしい作文を課しておらず、文章作成上の能力形成に効果があったかどうか疑問が残る。

2.2 話し言葉との関係

歴史的に言えば、書き言葉の体系は話し言葉からできたものとはいえ、両者は「異なった特徴をもつ別個の体系ととらえなければならない。話し言葉と書き言葉では、使用する社会・文化的状況は使用する際の認知過程は異なり、それらの違いによって話しことばを使用する人間と書き言葉を使用する人間は異なってくる。そしてそれらの違いは、言葉そのものの違いをさらに生み出していく。」と杉本（2001）に言わしめるほど、別々な存在として認識されている。また書き言葉の構成物である文字にいたっては、Bloomfieldは「言語ではなく、言語を目に見える形で記録するための手段にすぎない」と言っている（『言語学百科事典1992』）。しかしそれでも、両者は「互いにもう一方を無視することのできない相補的な性格を持っている。それは私たちが、話す場でも書き言葉を使い、書く場でも話し言葉を使い、中間的なモードで両者を巧みに使い分け、豊かな言語生活を送っている」（中山 2011）ように、相互に依存しているというのが正しい認識であろう。相互依存している以上、単体ではなく、両者を俯瞰するような見方でなければ、この関係性を探ることはできない。そしてこの関係性を探らなければ、越境する書き言葉の性質やそれを担う心内の情報処理過程を解明することにはつながらない。解明を一步進めることにより、書き言葉の習得を困難にしている要因を取り除くことになり、習得に近づいていくことができるのである。

3 考察

3.1 話し言葉と書き言葉の接点

両者の接点は、畠（1989）によって、カテゴリー化および指摘されたものがある。心内の情報処理において、推敲の過程がどの程度表現されるかを基準にし、話し言葉と書き言葉を分類している。その際のキーワードは「完全性」で、話し言葉を不完全さが強いことば、書き言葉を完全性が高いことばと位置づけている。両者ともに程度があり、連続的な変化が認められるため、話し言葉の中に書き言葉の要素が入り込んだものが往々にしてある。話し言葉のうち、完全性が高いと分類されている内容のものに関しては、書き言葉的要素が強く、書き言葉は話し言葉に侵入していると言えるのではないか。表1の下にあるほど、時間を使い、推敲を重ね、

訂正を繰り返した結果、発話される性格のものだということがわかる。話し言葉が書き言葉に転換される心的メカニズムは正統性、論理性、主張性の三つの思考が働くことにより行われることを中山（2011）が論じているが、ここで会話における心内の情報処理について考えたい。話し言葉を用いる会話では、話題の連続性から文脈把握をたやすく行うことができ、そのため省略を多用することになる。一方で、会話相手との間に密接な関係を築こうとする主張性思考を持つようになり、それに引き寄せられるように、お互いを高い信頼感で結ぶために、正しい言葉を発しようという意識（正統性思考）が芽生える。結果的に完全性は高みに上がり、論理性思考が表出した書き言葉が随所に散りばめられた話し言葉となっていく。会話の中ではある程度の時間が経てば、推敲する時間が与えられるため、完全性を高めようという意識が働き、書き言葉が徐々に表れてくるのである。また定延（2003）は、「会話は個人的な体験を共有の知識としていく」行為であると論じている。話し言葉は会話現場での考えのみに委ねられているため、繰り返すことによって理解を深め、体験を超えた知識にしようとしているのではないか。この過程において、会話相手との共有の知識とする以上、不審や疑問が残らないようにあいまいさを排除して、完全性の高まりを追求、すなわち書き言葉の意識化が行われることが推察できる。

表1. 話し言葉と書き言葉のいろいろ

	話し言葉	書き言葉
不完全さが強い	おしゃべり 打合せ・相談 座談会 会議での発話	筆談 走り書きのメモ 走り書きの手紙
完全性が高い	講義 講演 結婚式のスピーチ 国会での代表質問 青年の主張 ニュース	家族への手紙 社内メモ 新聞 研究論文 小説 詩

もう少し具体的な書き言葉として、漢語を取り上げてみたい。漢語は豊かな造語力を使って、要約・書評を施し、簡潔明快にする機能を持つ。だからこそ、冗長になりやすい会話と違って、文章中に登場する割合が高く、書き言葉としてのイメージがもたれることが多い。実際に宮島（1972）は、文章語には漢語が多いことを示し、和語との対比で漢語は大規模的、公的、抽象的、限定的な面が強いことを明らかにした。漢語はそもそも外国からの借用語であり、確かにそのようなよそよそしさから抽象性を感じる。それと同時に広がりを持つ意味を限定的に捉えることもできる。また、外国語由来であることから、特権階級のみが理解できる特別なものと

としての意識や四字熟語などでインパクトを重視する方策にも用いられることがある。このように漢語は、先に提示した三つの思考が満遍なく入り込んだ典型的な書き言葉だと言える。しかし漢語は和語よりも語彙数が多く、我々のはもはや漢語なしでの言語生活を送ることはできない。文章はもとより、会話の中に登場する頻度も相当高い。その中で、漢語の持つ特徴を効果的に会話に取り入れようと、差はあれ、漢語を意識することは日常的なことであろう。漢語が入り込んだ会話をする機会が増えれば、必然的に漢語つまり書き言葉を意識する機会も増える。文章と隔たりのあると思われた会話をするとは、実は書き言葉の意識化を促し、文章力向上に大きく寄与することになるのではないか。

3.2 認知理論からのアプローチ

では、次に漢語を構成する漢字単体はどのようなプロセスで意識されるのかについて、視点を向けて、心内の情報処理について考察を深めたい。

漢字は、シナーチベット語族の圏域で誕生していることから、その圏域では言語と文字の関係が明瞭で対応が見出しやすい。しかし日本語は別系統の言語であるため、そもそも対応していない。このような事情から日本語と漢字の間にはズレが生じており、しっかりと意識することで調整していると考えられる。話すときに産出される音声情報は、集団・地域・時期などで大きく変化し、また、あるコミュニケーション圏域を固有なものとして特別感を出すために、しばしば変異体が産み出されやすく、明確な意味を求める上で心許ない。よって、それを確固たるものにしていきたいという思いが表れる。一般的なものと異なる変異体があふれる音声情報だけでは、会話相手との認識の共有化に限界があり、論理性を備えた書き言葉を構成する文字が意識に上り始めるのである。

また漢字に対する意識は、日本語の文章が漢字仮名混じり文であることから述べるができる。採用の理由はひとえに、音声情報を文字化しただけの仮名のみの文章では、読みにくい、わかりにくいということからであろう。その結果、文字を使わないはずの状況でも意識下に残る。音声という一辺倒なものに肉付けをし、わかりやすさ（論理性）を求めたためと考えられる。日本語は三種類の文字（アルファベットを含めれば四種類）が日常的に使用されるという珍しい文字体系を持つ言語であるが、そのことが影響するのか、文字に対する思い入れが強い。例として、日本の文学の歴史を垣間見ると、文字を愛で楽しむ行為が認められる。日本語の持つ情感には、音感より字感のほうが好まれているかのようなのである。実際に詩や俳句などは、目で見て味わう流儀がある。これは文字を意識して、つまり書き言葉に転換する際の要因の一つに挙げられる正統性を意識して、格式高いニュアンスを創出していると推察できる。その上で、本文に表れている以上に、余韻まで楽しもうという雰囲気を感じられる。この文字の持つ力は、仮名だけでは表現することができない。例えば、現代ではカタカナの言葉が氾濫しているとはいうものの、到底カタカナだけで思索や仕事ができとは思えず、漢字がない生活は考えられない。何より、日本人の姓名はほぼ漢字のみで構成されている。姓名の音だけを聞

くと、いくつもの候補が想定できることもあり、どのように記すのかを頭に浮かべながら、相手に尋ねることも多い。しかし、漢字を確定させなくても、文脈として相手の名前であるという認識がされているため、会話の展開を何ら邪魔することはなく、スムーズに意思疎通が行われているはずだ。しかし、本当にスムーズであろうか。日本語は音の種類が相対的に少なく、同音異義語の発生が多くある。そのような状況では、話者は語の意味に関して安定した心的表示を持っていたいという傾向を持つ。なぜなら、意味が不明瞭なまま頭の中でボンヤリとその事象を考えていることは、会話の展開を妨げることになりかねないからである。同音異義語をはじめとした多義性を容認したままでは、いかに文脈依存度が高いとはいえ、あいまい性を排除できない。多義性を回避するために、文字の意識が芽生え、確定作業を繰り返した上で、会話を続けていく志向が見られる。Taylor (2008) の言う「視点投射 (perspectivization)」による働きで、領域を特化し、ほかの部分を背景化することで、題材を際立たせることにもつながり、その意味の獲得に大きく影響を与えているとも考えられる。

認知理論では、形式と意味を結びつけることが言語獲得の実現を早める、とされている。メタファーなどの比喩は、共感を覚え、わかりやすさが追求されるから行われる。共感を増す方法のひとつとして、文字を意識してできるだけすばやく形式と意味を結びつけようという思いがある。また、これまでの経験を活かすことが認知能力の働きであることから、想定した候補から逸脱した場合は、それを確認するために尋ねることは容易に考えられる。その際、メトニミーに見られるような「参照点能力」(初山 2009) を発揮して、表出している姓名を情報の一部とみなし、そこから全体像を把握しようという意識が働いている。その結果が体験を超えた知識となり、認識を共有化することにつながっていくのである。

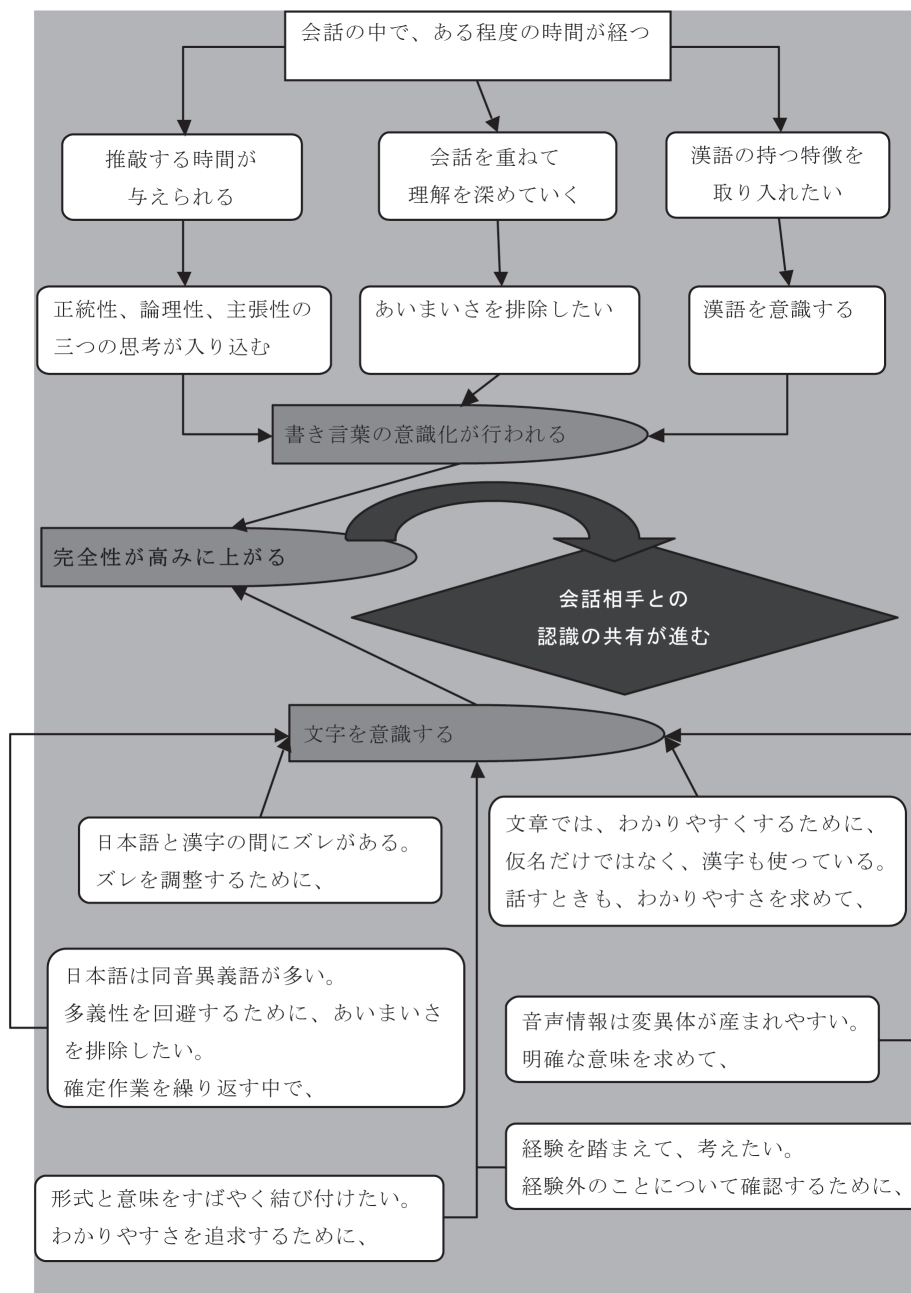
4 まとめ

4.1 コミュニケーション上の意識

書き言葉が、どのようにして話しながら意識されるのか、前節を踏まえてまとめると、表2のように図示できる。様々な出発点があるが、会話相手との認識の共有を求めて、書き言葉および文字は話しながら意識されるのであろう。人と人とのコミュニケーションでは、何かを相手と共有することで結びつきが実感できる。現代はIT媒体が発達し、人と人との関係が希薄になっていると言われるが、そのIT媒体を共有することによって、やはり結びついている実感を得ている。携帯電話を肌身離さず持っていることやお互いに同じウェブサイトにアクセスしていることなど、象徴的な事象を共有することで成り立っている。一方で、この結びつきは親密ではなく、楽さや便利さを求めて適当に交信をしたがっている気持ちの表れだと見る向きもあろう。しかし裏を返せば、面と向かったコミュニケーションはエネルギーが必要で、気心の知れた間柄でなければ疲れる、と言えるかもしれない。そこで、無意識にエネルギーを節約する方向に動く。IT媒体を選択することも一つだが、面と向かった相手と気心の知れた間柄になら

うと、共通の話題や共感できる内容で認識を共有できれば、疲れないコミュニケーションへと変わっていく。その方法の一つが書き言葉の意識化にある、というのは言いすぎであろうか。

表2. 書き言葉が会話の中に入り込むときの意識



4.2 日本語教育とのかかわり

日本語学習者に対しては、四技能のバランスがとれた習得をめざすのが前提だが、その習得方法はひとつひとつがバラバラで一体感がないように感じる。特に「書く」は作文の授業に頼っている面が強い。作文を書いていくうちに慣れて文章が上手になる、という発想を鵜呑みにするのはやめたほうがいい。なぜなら、書き言葉を認識しない状態で繰り返し練習しても決して運用には至らず、新しい場面ではまたはじめから意識をし直すからである。これでは、いくら練習を重ねても、上手になるまでの道は遠い。「書く」行為は作文を通すほかはないかもしれないが、それに至る前の段階に関しては、特段書かなくても対応ができるはずである。書き言葉をしっかりと運用するのはどうしても難しさを伴うが、運用前に、意識する機会が多ければ、「書く」行為が少なくとも文章力を上げることは可能である。それには、会話を数多くこなすことが効果的だと言いたい。ちょうど学習者も、第一に会話力の向上を求める傾向がある。会話そのものは、不完全さが強い話し言葉を使う場合が多い。そして、その特徴を生かして、多くの会話シーンを作り上げることが可能である。会話の中でも、推敲する時間が増えてくれば、書き言葉を意識できる。障害なく自然と意識するために、様々な会話シーンを想定して、同じ意味でも違う表現が操れるように、位相を意識することが肝要である。話し言葉と書き言葉の垣根が、できるだけ取り払われるような教育方法を再考することが求められている。

【参考文献】

- 宮島達夫（1972）「動詞の意味・用法の記述的研究」『国立国語研究所報告』43 秀栄出版
 畠弘巳（1989）「話しことばと書きことば」『日本語学』11 明治書院
 David Crystal編著（1992）『言語学百科事典』初版 大修館書店 p31
 小野り子（1994）「日本語を母語とする学習者の書き言葉に対する意識—自己紹介の作文において—」『日本語と日本語教育』23 慶応大学日本語・日本文化教育センター
 田中衛子（1997）「日本語学習者への作文指導—上級者向け講座における実践—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』5 名古屋大学留学生センター
 杉本卓（2001）「マルチメディア時代の話しことばと書きことば」『言語』30（1） 大修館書店
 杉江厚美（2001）「書き言葉に対する短大生の意識」『紀要』16 pp137-164 名古屋明德短期大学
 定延利之（2003）「体験と知識—コミュニケーション・ストラテジー」『国文学 解釈と教材の研究』48（12）学灯社
 山本雅子・大西五郎（2003）「話し言葉と書き言葉の相互関係—日本語教育のために—」『言語と文化』8 愛知大学語学教育研究室
 ハドソン遠藤睦子（2003）日本語・日本文学学会、全欧日本学会年次会、ハワイ大学東アジア言語・文学学科特別講演「話し言葉中心・書き言葉中心の2本立て上級講座」
 石黒圭（2004）「話しことばと書きことば」『よくわかる文章表現の技術Ⅰ』明治書院
 Michael Tomasello（2006）『心とことばの起源を探る 文化と認知』勁草書房
 John R.Taylor（2008）『認知言語学のための14章〈第三版〉』紀伊國屋書店
 初山洋介（2009）『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語学』研究社
 中山英晋（2011）「話し言葉から書き言葉への転換の要件」『平成22年度目白大学大学院言語文化研究科日本語・日本語教育専攻修士論文』
 日本語学会2013年度春季大会シンポジウム報告「話し言葉と書き言葉の接点」

（平成26年11月4日受理）